

2021年度町田市総合教育会議
議事録

1 開催日 2021年5月11日

2 開催場所 第1委員会室

3 出席委員 市長 石坂 丈一
教育長 坂本 修一
教育委員 後藤 良秀
教育委員 森山 賢一
教育委員 井上 由奈
教育委員 関根 美咲

4 市長及び町田市教育委員会教育長の署名

市長

教育長

5 出席事務局職員	副市長	高橋 豊 (司会)
	政策経営部長	小池 晃
	経営改革室長	黒田 豊
	政策経営部次長兼企画政策課長	唐澤 祐一
	子ども生活部長	神田 貴史
	学校教育部長	石坂 泰弘
	指導室長	小池 木綿子
	教育総務課長	田中 隆志
	教育総務課新たな学校づくり担当課長	小宮 寛幸
	施設課長	平川 浩二
	学務課長	田村 裕
	生涯学習部長	佐藤 浩子

6 議題 「町田市新たな学校づくり推進計画 (案)」・「町田市立学校施設機能別整備方針 (案)」・「町田市立学校個別施設計画 学校整備計画編 (案)」について

7 議事の概要

【午前10時27分開会】

- 副市長 それでは開会にあたりまして、市長からご挨拶をお願いします。
- 市長 おはようございます。お忙しい中、お集まりいただきまして、ありがとうございます。町田の子どもたちのためにご尽力いただいていること、改めて感謝申し上げます。
- 今日は、この議題にありますように、計画や方針の案が三つあります。中身としては新たな学校づくり推進計画と、機能別整備方針と、個別計画。皆さんから、いろんな意見をいただいて、これからどうしていくかということで、忌憚ない意見交換ができればというふうに思います。
- 本題に入る前に、ここのところでコロナウィルスの問題もありますので、目前の話として去年、学校の休業がありました。そのような状況の中で、私自身が、心配していることは何かというと、緊急事態宣言の延長を受けて、6月1日から学校が休みになることを想定した場合に、教育委員会として、どうすべきか、ということをお話をいただければありがたいなと思っております。よろしくをお願いします。
- 副市長 ありがとうございます。今、市長のほうから本日の議題とは別に、臨時休業の備えということで、お話がありました。議題に入る前にこの件について教育委員会から説明いただきたいと思います。小池指導室長、お願いいたします。
- 指導室長 今、市長からお話のありました、臨時休業になった場合のICTを活用したオンラインの授業につきましては、テレスタディということで、Live型（同時双方向型）と、それから二つ目として教材配信型を考えております。これにつきましては、6月以降の実施を想定しております。まずLive型（同時双方向型）につきましては、現在も感染等が不安で学校に行くことができない児童、生徒がおりますけれども、そういった生徒、それから不登校傾向にある生徒につきましては、学習の保証、心のケアということで可能な範囲で実施しているところでございます。また2点目で申し上げました、教材配信型ですけれども、こちらにつきましては多くの教材、動画というものが必要になってきますので、現時点ですべての学校において一斉にスタートすることは難しい状況でございまして、今後、準備を進めていく予定でございまして、そこで市長がおっしゃいました6月1日から、もしもということに備えまして、Live型を全校で開始することができるように、5月の後半から6月にかけて、学校の中で試してみたりですとか、実際に学校と家庭でつなぐというようなことを考えておりまして、準備をしっかりと進めていく所存でございます。以上でございます。
- 副市長 説明ありがとうございました。今の説明を受けまして、市長からご発言があ

りましたらお願いいたします。

市長

ご家庭のほうの通信環境っていうのは、とりあえずできていると思えばいいですか。つなぐと、今おっしゃったのですけど。

副市長

指導室長お願いします。

指導室長

家庭の通信環境なのですけれども、昨年度も調査をいたしました。今年度も改めて現在、調査をしているところでございます。今週末に各学校から、その状況が報告される予定でありますが、その際に家庭でうまく、やはり整わない場合につきましては、今、各学校に40台の通信機器がございまして、ドングルがございまして、これを貸し出して、各家庭で対応することができるよう、それでは台数が足りないという場合につきましては、学校の図書室ですとか、図書室が、まだ通信環境が整っていない場所もございまして、通信環境を整えられる教室などを、うまく活用できないかということを考えているところでございます。

副市長

いつもありがとうございます。市長、何か。

市長

それなりに通信環境も含めて準備進めているという話ですので、ひとまず安心という感じですね。机を毎日拭いたり、結構、現場のほうは大変なことが起きていると聞いていますけれども、教育委員会と一緒に、我々の市長部局のほうも協力してやっていきたいと思っております。

議題からだいぶ離れましたけど、大事なポイントっていうか、課題を共有できるっていうことでよかったと思っております。本題に行ってください。

副市長

ありがとうございました。それでは本日の議題、「町田市新たな学校づくり推進計画（案）」、それから「町田市立学校施設機能別整備方針（案）」、及び「町田市立学校個別施設計画学校整備計画編（案）」について、協議に入りたいと思っております。この議題については、教育委員会のほうから協議の申し出がありましたので、まず教育委員会から協議理由と協議内容の説明をお願いいたします。

教育長

それでは、私から協議理由と、その内容についてご説明したいと思います。2021年4月16日に、まちだの新たな学校づくり審議会から「町田市新たな学校づくり推進計画（案）」について、答申いただきました。この推進計画案の策定を審議会に諮問した際に、私から委員の皆様に対して、町田の未来の子どもたちの新たな学校づくりのあり方という「将来の夢」を語るような議論と、その夢を実現する手段として、学校統廃合を含めた、新たな通学区域を考えるという「将来の現実」を見据えた議論、この両方の議論を重ねていただきながら答申を賜りたいというような挨拶をいたしました。審議会では、新たな学校づくりのあり方という「将来の夢」について議論を始めた当時、コロナ渦の中で、オンライン授業が話題になったときでして、将来ICT機器が整備されれば学校という施設は要らなくなっちゃうのではないかと、というような考え方も報道等で紹介されていまして、審議会委員の皆様の間

で、学校に通学して学ぶ意味を踏まえた、新たな学校づくりの必要性が議論されました。この議論の結論は、児童・生徒が協働的な学習や学校生活を通じて、思考力・判断力・表現力や、社会性・人間関係を形成する力といった資質・能力を育む場としての学校の重要性が町田市立学校施設整備の基本理念として、答申書に示されております。

私自身も本来の学校教育では、授業や学校行事、あるいは体験活動等を通じて、子どもたちが教員や同級生、先輩や後輩、地域の皆様と直接対面し、対話してコミュニケーションを取ることが大事で、互いに認め合い、励まし合いながら学び合う、そういう集団を作っていく中で、人間関係を学び、自らの人格形成に役立てていく、そのような姿が学校教育において大切にされなければならない基本であると思っております。

一方、学校統廃合を含めた新たな通学区域を考えるという「将来の現実」について、審議会からは、児童・生徒数の減少や学校施設の老朽化が進行する将来における、新たな学校づくりを実現する手段として、もちろん現在ある市立小中学校 62 校、全て建て替えられればいいのですが、それでは町田市の財政が持続不可能になってしまいますので、2040 年度までに実現を目指す「新たな通学区域」と、市立小学校を 42 校から 26 校に、市立中学校を 20 校から 15 校に統廃合する場合の、新たな学校の候補地、そして、それを進める優先順位が答申されました。

教育委員会では、この優先順位を尊重しながらも、学校施設の老朽化の状況などのデータを合せ考えて、変更を加え、単独で改築する学校も含めて 2040 年度までに、新たな教育環境で授業を行う目標を示す「新校舎使用開始目標年度」というものを示しました。

前述いたしました、学校に通学して学ぶ意味を踏まえた新たな学校施設整備のあり方と、2040 年度までに実現を目指す、新たな通学区域のあり方、その実現のプロセスにおける学校と地域・保護者の皆様が協働して学校づくりを進めるための方針をまとめたものが、「町田市新たな学校づくり推進計画（案）」でございます。

また、審議会では、推進計画案に掲げている学校施設整備の基本理念・基本方針を具体化するために、学校の施設機能別整備方針についても議論が交わされ、答申されました。この中では、現地調査やアンケート調査をもとに、学校現場の課題をつぶさに捉えながら、学校に通学して学ぶ意味を踏まえた学校施設のあるべき姿が示されております。

教育委員会では、この答申に基づいて「町田市立学校 施設機能別整備方針（案）」を取りまとめました。そして、この推進計画案及び整備方針案に基づいて、計画的に老朽化対策を進め、新たな学校づくりに求められる機能・性能を確保するため、学校の建て替えや、改修工事の想定時期、事業費などの内容を定めた「町田市立学校個別施設計画 学校整備計画編（案）」を取り

まとめました。

本日の総合教育会議の協議事項として付議いたしましたのは、教育委員会ではご説明しました、二つの計画と、整備方針を同時に策定したいというふうにご説明しておりますが、学校は学校教育の場であることはもちろんですが、災害時の防災拠点でもあり、地域活動やスポーツ活動の拠点でもあり、小学校においては学童保育クラブや、放課後子ども教室「まちとも」を実施する放課後活動の拠点でもございます。また、新たな学校づくりには、中長期的な投資を伴うことから、その目的を市長と共有し、共通認識をもって「まちだの新たな学校づくり」を推進するために本日の協議事項として付議させていただきました。私からの説明は以上でございます。

学校教育部長 それでは私から協議事項のポイントについてご説明いたします。本日の協議事項に関します資料4-1から4-4につきましては事前にご覧いただいていると思いますので、机上に配布させていただいております資料4-5「各計画案のポイント」をもとにご説明いたします。

協議事項のポイントの1点目。こちらは、「学校に通学して学ぶ意味」を踏まえた新たな学校づくりとしております。「町田市新たな学校づくり推進計画（案）」では、ICTを活用した教育活動が進展する将来においても、さらに学校に通学して学ぶ意味を踏まえまして、協働的学習や学校生活におけるコミュニケーションを促進することができるような学校施設機能を整備する方針を定めております。また、学校と地域・保護者が協働して育むための拠点として学校内に「コミュニティルーム」を整備するとともに、新たな学校の教育目標を話し合う中で学校と地域・保護者の役割をそれぞれ確認するプロセスを重視しております。

続きまして、1ページ目の下段になりますが、推進計画案で定められている整備方針におきまして、新たな学校づくりを進めた場合に、どのように学校施設が変わるか、その整備のポイントと整備イメージについてご説明いたします。整備のポイントの1点目は協働的な学習を重視した普通教室の機能拡充です。こちらの資料ですと、3ページ・4ページのイラストが具体的なイメージになります。高度経済成長期に建設しました学校の普通教室は狭くて、児童・生徒の荷物であふれております。現在の普通教室では、机を移動させながら協働的学習を進めることは中々難しい状況にありますので、まず面積を広げることを想定しています。小学校につきましては、オープンスペースを整備することを原則とし、中学校につきましては、普通教室の面積を大幅に広げることを想定しています。オープンスペースがある小学校の場合、従来の普通教室の約1.7倍の広さで授業を行うことができます。中学校の場合、従来の普通教室の約1.2倍の広さで整備しますので、中学生の体格でもゆとりを確保することができるかと考えております。また、市立学校にはすでに導入済の大型提示装置ですが、黒板では映りが悪いので、ロールスクリーン

ーンやマグネットのホワイトボード、または白い模造紙を黒板に貼って授業を行う光景をよく見かけると思います。そうすると、書き込むスペースが黒板の半面しか取れなかったり、映写するスペースが固定されて動かせないといった課題がありました。今後の学校づくりでは、大型提示装置を含めたICTの活用が前提となりますので、投影、書き込みと掲示をすべて兼用することができるように、ホワイトボードを整備するとともに、大型提示装置も左右にスライドし、映写位置を自由に変更することができることを想定しています。また、ICTを活用しました協働的学習を普通教室内のあらゆる場所で行うことができるようにするために、壁面についてはすべてホワイトボードを整備することを想定しております。

また、普通教室を狭く感じさせる最も大きい要因であった児童・生徒の荷物につきましても、小学校・中学校いずれも十分な収納スペースを整備して机を自在に動かしやすくすることを想定しています。整備のポイントの1点目の説明は以上です。

整備のポイントの2点目は、ラーニングセンターと呼んでいる学校の図書室を機能拡充した空間の整備です。資料5ページのイラストをご覧ください。図書室はこれまでも教育活動にとって重要な機能でしたが、図書を活用した協働的学習をさらに充実させるために、従来の図書の閲覧スペースに加えて、図書や多様なメディアを活用しながら協働的学習を展開することができる「ラーニングルーム」を備えた「ラーニングセンター」を整備します。図書を持ち込んだ教育活動はもちろんのこと、壁面全体に投影することができる大型提示装置や可動式の机や椅子の配置を想定していますので、動画や画像といった様々なメディアを活用しながら、普通教室だけでは実現できない協働的学習を行うことができる空間として整備することを想定しております。また、小学校の図書室は、放課後活動または地域開放等で活用することを想定した位置に配置することを想定しています。協議事項のポイントの1点目の説明は以上となります。

続いて、資料4-5の2ページをご覧ください。協議事項のポイントの2点目は、「新たな学校づくりを実現するための通学区域の再編」になります。ご承知のように、2040年度までに児童・生徒数が約30%減少する見込みである状況や、学校施設の老朽化が深刻な状況におきまして、市立小・中学校の建て替えを進めながら「学校に通学して学ぶ意味」を踏まえた新たな学校づくりを実現するために、推進計画では、市立小学校を42校から26校、市立中学校を20校から15校に学校統廃合を行う目標を掲げました。具体的には、2040年度までに実現することを目指す「新たな通学区域」「学校候補地」及び新たな学校施設で教育活動を開始する「新校舎使用開始目標年度」を定めています。

協議事項のポイントの3点目です。資料でお示ししている2つの計画と1つ

の方針を同時に策定することになります。推進計画案では、学校統廃合等を契機とした市立小・中学校の建て替え等を一貫した基本理念・基本方針で進めるために「町田市立学校の新たな学校施設機能の基本的な考え方」を定めております。さらに、基本理念・基本方針に止まらず、その内容を具体化するために、普通教室や特別教室といった機能別に室数、面積、配置等の新たな学校づくりに求める機能をまとめた「町田市立学校 施設機能別整備方針（案）」を同時に策定いたします。

そして、推進計画案及び整備方針案に基づきまして計画的に老朽化対策を進め、新たな学校づくりに求められる機能・性能を確保するための学校の建替えや改修工事の想定時期及び事業費などの内容を定めた「町田市立学校個別施設計画 学校整備計画編（案）」も同時に策定いたします。学校整備計画案を策定した場合、計画期間である 2055 年度までの改修を含めた総事業費は 2,541 億 7 千万円、総改築（建て替え）費は、2,088 億 5 千万円の一大プロジェクトとなります。

このような個別施設計画は文部科学省から全国の地方自治体に策定を求めているものであり、多くの団体で策定しております。しかし、新たな学校づくりの実現に向けて、学校統廃合を含めました通学区域の再編を行う計画と、新たな学校づくりに求める機能を具体的に定めた方針、そしてそれぞれの個別の建物の計画、この 2 つの内容を反映した学校整備計画案を三位一体で同時に策定するのは全国で初めてということになります。

協議事項のポイントの説明は以上になります。

副市長

ありがとうございました。それでは、ただいま教育長と学校教育部長との説明がありました内容につきまして、市長から発言をお願いいたします。

市長

1 年 8 カ月、19 回、確か審議をいただいたと思います。検討部会 12 回ということで、精力的な調査、審議を重ねてきて答申をまとめていただきました。それをベースにして、二つの計画、あるいは一つの方針ということをもとめていただいて、本当にありがとうございます。市長になってからというか、市長になる前もそうなのだけど、常に時代は何か、そういうことを、自問をしてきました。今はどういう時代なのかということですよ。昔と言っても、今は I C T の時代だから 5 年経つと昔ですね。昔、5 年あるいはもっと 10 年、20 年前はどうだったのかな、教育についても、あるいはここで議論されている学校のあり方についても、昔はどう考えていたのか、あるいはそれを取り巻いている環境っていうのは、今と同じだったのだろうかというふうに考えると、随分変わっているのですよね。時代認識。戦後の昭和で言うところ、22、3 年とか、24、5 年とか、その辺に基本的な教育に関する法律はできているのですよね。学校給食なんかもそうだし、もちろん教育基本法もそうなのですね。その理念があんまり変わってないですね。やや古いというか硬直的なところがある。そういう中で、うちの審議会、あるいは教育委員

会、そのものが新しい時代の感覚を取り入れて議論されているということだと思っています。ですから逆に言うと、現在の法律なり、文部科学省の指示なり、そんなものが足かせというか、桎梏（しっこく）っていうか、そういうものになっているのではないかなと思っています。そういう新しい時代感覚みたいなのを踏まえて、教育委員会としてまとめていただいたと認識しております。独自の計画づくりをしたということは、大変評価に値するのではないかなと私は思っています。そういう意味で今回まとめていただいたことに、本当に感謝をしたいと思います。どうもありがとうございました。

副市長

ありがとうございました。今、新たな学校づくりにまとめたっていう意味ということですね。今日もお話にありました。先ほど説明がありましたけれども、その中で学校に通学する、学ぶ意義についてとか、そういうことが非常に重要になってくるっていうふうに考えております。教育委員の皆様のご意見を聞きたいということにしていきたいということに、次は移っていきたいと思います。今、教育長から先ほど協議理由を述べていただいた際に、学校に通学して、学ぶ意義について、既に言及をしていただいておりますので、教育長以外の教育委員の皆様からご意見をいただきたいと思います。よろしくをお願いします。それでは井上委員からご発言をお願いしたいと思います。

井上委員

私は学校に通学しないことによって生じる、デメリットを通して、その意味を探ってみようと思います。まず1点目、友達とのコミュニケーションについて。通学しないと友達を作ることが非常に困難だと思います。ボタン一つの操作でフォローリクエストするのは違って、生身の人間に関わり、信頼関係を築くことはたやすいことではないからです。運動会や合唱コンクール、修学旅行などがなければ、みんなで力を合わせることや、仲間と一致団結することの大切さを学ぶ機会がなくなってしまいます。大学では昨年の春からオンライン授業になったところが多かったようですが、授業が終わったあとに、ねえねえ、さっき発表していた子だよね、などと話しかけて友達になるということができず、ランチを共にすることもできず、上京してきたものの、友達が1人もできず、孤独を感じる1年生がたくさんいたと聞きました。そこで小2の娘に、「あなたはなぜ学校に通っているの」と尋ねると、「みんなと勉強するためかな、1人じゃ全然やる気起きないもん。先生が知らないことを教えてくれるのが面白いよ。それに先生とか友達とかいろんな人に会えるのが一番楽しみ」と答えました。同年代との友達関係が社会性を身に付けたり、生きる力を養ったりするのに役立つと言われてはいますが、大人になるとほとんどが団体に属することになりますし、起業した場合でも顧客があつてこそ成り立つわけなので、様々な方とコミュニケーションを取る力は、やはりとても重要であると考えます。またコミュニケーションを取る中で、自分には知らないことがたくさんあるのだということに気づくことができるのは、学校の一つの価値だと考えています。

2点目、状況の把握について。先生にお話を伺ったところ、オンライン上では視覚聴覚情報が限られているので、先生側も鉛筆の動きや表情、姿勢などから子どもがどんなことを考えるのか、どこでつまづいているのかを察知しづらいということでした。対面ではそれらの情報をキャッチして指導の方法を変え、クラスの雰囲気によって微調整しながら丁寧な指導を心がけてくださっているということがわかります。また先生1人対クラスの子どもたち、という構図に見えがちですが、子どもたち同士が互いを見守る目を持っていて、教師は気づかないような変化に気づくことができる面もあるかと思えます。今日、何々ちゃんが元気なかった、足かばって歩いていただけ怪我したのかななど、時にはそこから重要な情報が導き出されることもあります、友達に関心を持つこと、互いに支え合うことを体感できる場が学校なのではないでしょうか。

3点目、子どもたちの生活の場としての役割について。我が家もそうなのですが、昨今、共働きの家庭が増えているため、子どもたちにとって学校は生活の場となっております。つまり通学しないと子どもたちの生活の場が失われるだけでなく、共働きも難しくなるという現状があります。もちろん学校は託児施設ではありませんが、社会を回すには学校が必要であるといえるのではないかと思います。また家庭に居場所がない子どもにとっては、学校が子どもの居場所であり、逃げ場になり得るので、不登校児が年々増えており、その対策もしなければならぬことは確かですが、同時に目には見えない貧困格差も広がっています。そんな中で給食を食べることができて救われている親子が存在しているという事実からも、生活の場として学校に通学する意味があるのではないかと考えました。以上です。

副市長

ありがとうございました。では、続きまして関根委員、よろしくお願ひします。

関根委員

私からは、子どもたちが学校に集うことでのメリットと、登下校や学校生活を送ることで学校に通うことでのメリットを考えてみました。まず、子どもたちが学校に集うことでのメリットですが、学校生活というのは人と人がふれあいながら集団生活を送ることです。様々なシチュエーションに出くわすことで、自分以外の人のお気持ちをすることができたり、その場の空気を読みながら、自分で考えて動くことができるようになって、社会性、コミュニケーション能力を培うことができるのではないかと思います。また授業での学習において、子どもたち同士が意見を出し合ったりすることで、自分だけではない、他人の考え方にふれることができるので、改めて自分で考える力を養うことができます。そしてそれが結果として学業のブラッシュアップにもつながっていくのではないのでしょうか。学業だけではなく学校生活の中で、日常会話など一見無駄な話をするのも大事です。そんな会話の中で、人はそれぞれ違っていて、たくさんの気持ちの中で自分は生きているということ

を、そういった会話の中で自覚でき、他人を認める力が備わってきます。私は小学校で生活指導補助の仕事をして15年目になりますが、いつも思うことがあります。小学生になって一つの教室にそれぞれ個性を持つ子どもたちが集まると、いろいろトラブルが起こります。でも、まずは子どもたちがそれぞれ個人を認められるようにみんな違っていいという気持ちを持たせられるような指導ができると、みんなが自分と違う人間で一人一人いろんな気持ちがあるんだなと理解して、上手なコミュニケーションの取り方や、他人を思いやる気持ちが生まれます。特に思考の凝り固まらない低学年のうちに柔軟な考え方ができるときに、しっかりと集団生活における教育指導をすることで、高学年になってもいじめなんかはなくなると思います。実際、このようなご指導された先生方の学年やクラスの子どもたちは、学年全体が仲良く、助け合って成長しています。このように学校というところは、たくさん遊んだり、話したり、喧嘩をしたりして、その経験値を積む場所だと考えます。それはその後、成長していろんな問題に直面しても、自分で解決する力、いわゆる自分力が備わっていくことにつながっていくのではないかと思います。

次に、登下校や学校生活を送ることで、学校に通うことでのメリットについて述べたいと思います。登下校において通学路を使って自宅から学校に通うことで、周辺地域の人々の日々の生活を認識することができ、地域の様子を知ることができます。元気に挨拶をしたり、されたりすることで地域の方々とのコミュニケーションを取れますし、地域の方々にも子どもたちを理解していただくチャンスにもつながると思います。また登下校で学校までの道を歩いたりすることや、学校生活の場において体育の授業、階段の上り下りや、教室を移動したりすることが体力面のアップにもつながります。私ごとで恐縮ですが、アップダウンの激しい金井の坂道を歩いて、毎日登校したり走ったりすることで、しっかり鍛えられましたし、あの大迫傑先輩のお母さんも同じことをおっしゃっていました。金井の坂道が2人を日本代表にしてくれたのかもかもしれません。

以上、学校に通う意味を考えたとき、将来ICTを活用したオンラインばかりの体制で学校に通うことが少ない状況だと、ますます人とのかかわりが薄くなり、人とかかわることに苦手意識を持ってしまう子どもが増え、結局不登校生徒も増えてしまうのではないのでしょうか。よって子どもたちが学校へ通うことでのメリットは十分にあると考えます。以上です。

副市長
森山委員

ありがとうございました。続きまして、森山委員、お願いします。

このお題をいただいて、なかなか難しい内容だということを感じています。先ほど市長のほうから文科省の話がありましたが、私も中教審には携わっています。9期10期中教審の委員を勤めまして、またこの11期、また3期目を4月から務めることになりました。やはりおっしゃるとおりだと

いうところがすごくあります。先ほど時代認識ということをお話しいただいたのですが、今回も学校に通学する意味というのは、100年前にもそうだし、明治4年に文部省ができて、それから明治5年に学制の発付がなされていますけど、そのときにも議論をしているわけです。それをずっと100年以上にわたってやっているのだけれど、同じことを議論したとしても、やはり解決策というのは時代の中で大きく認識が変わっているわけですから、そこの中での議論が必要だと思っております。そういうことから考えて今回のテーマは重要だと思います。

今日二つだけ絞ってお話したいと思うのですが、一つは、脱学校論です。脱学校論ということが、すごく言われた時期もあるわけです。1971年に出版された本で、「脱学校論」というオーストリアのイリイチという人が書いた本があります。これはどういう挑戦だったかということ、学校という制度は、教えられて学ばされる場所という関係はよくない、自ら学ぶという行為が必要だということです。だから学校がそういうふうにならないと本当の学校ではないのだということなのです。ただ、学校は要らないとは言っているわけではありません。学校の学びの方法が違うということを強く言っているということであって、学校の制度的な教育機関を超えるような学校でないと、本当の意味で学校とは言えないのではないかと思います。脱学校という社会をきちんと作っていくということが必要だということは、ここから出ている課題だと思います。

私のほうは、今回学校に通学する意味ということで、日本の学校の教育の特徴とはなんだろうということを、今回は考えてみました。そうするとやはり海外との比較をすると浮き彫りになります。例えば全員が同じレベルを目指すということは、我々にとって当たり前なのですが、海外見ると、日本の教育は変わっているとなるわけです。合格するまで何回もテストをするなど、とにかく全員が同じレベル以上を目指して教育する。子どもたちの所属するクラスという教室がある。先生たちの集まる職員室がある。我々にとっては当たり前なのですが、海外から日本の教育を見た場合には、日本の教育は変わっていると思われているわけです。例えば子どもたちが掃除をします。掃除をする国は少なく、大体、業者が入っています。日本にあるアメリカン・スクールも全部そうです。子どもが自分の教室を掃除するというそういう感覚は全くないわけです。日本はそういういろいろなかたちでの、学校の教育の特徴に何十年も支えられてきています。行事が多いというのもそうなのです。行事が多いということは、そこで何かしら、子どもたちに育てたい能力があるということです。例えば入学式があり、運動会もあり、学芸会も、合唱コンクールとか、こういう行事というのは全体の目標に向かって全員で取り組むわけですから、連帯感とかチーム力とか、そういうものを相当意識した学校のカリキュラムが展開されているということだと思います。

他にも日本は校内と校外で履物が違います。下駄箱もあります。これは学校の校内、校外ということ切り替えるようなかたちで示されるわけです。生徒がクラスに所属するということも、連帯感とか協調性とか、こういうところに相当大きな鍵があるわけです。お昼ご飯でもそうです。日本の場合は今、ちょうど町田市でも学校給食の給食センターとの議論もされておりますけれども、日本は給食で栄養士の方が考えた献立というかたちを取るわけです。これも同じ学校で食べるということについても全然違うわけです。これは恐らく日本は食育ということを重視している国なわけで、食べるということは、学校教育の中では重要な役割を担っているわけだと思えます。

他にもいろいろ考えてみますと、自分の使ったものは自分たちできれいにしています。掃除のこともありますけど、国民性などに大きく反映されているのではないかと思います。

結論ですけれども、やはり日本の教育は引き出すというよりも、むしろきちんと理解をする、させるような教育の特徴がありますので、例えば留年というものもないわけです。けれども海外では当然、年齢ではなくて個人の能力に応じた学年に配置するというのが一般的な考え方で、日本は年齢主義となっています。そういう大きな違いがたくさんあって、学校に通学する意味というのは、日本の場合は今のような特徴に支えられており、学校に通学するという意味が非常に大きいということが理解できると思えます。よくも悪くも日本の学校はそういう特徴を持っているからこそ、子どもたちに、今いわれているような力をきちんと育てていきたいというコンセプトが示されているのです。そのためそういう中で議論すべきだろうと思えます。

それから最後ですけど、今回中教審の答申でまとめてある個別最適な学びという、初めてこういう言葉を使ったわけです。これはある意味では冒険的というか、大議論になりました。個に応じた指導という文言ではだめなのかと。今までずっと個に応じた指導ということを書いてきたのですが、今回、大分進んだかたちでそれぞれ子どもの能力、相当高い子もおりますので、そういう子たちはどんどん高く伸ばせばいいという、ある意味では格差を生じさせるようなイメージとなるような、学びの形だと思えます。しかし、今、これから学校は個別最適な学びと、これに加えて協働的な学びというのを少し緩和するために、この二つをドッキングさせて中教審がまとめたわけです。そういう学びだからこそ、ある意味では学校でしか実現できないような要素というのがあるでしょうし、やはり学校の必要性というのはいくらも昔もそうだし、今は今で変わらない、そういう学校という大きな場所に大きな存在価値というのがあるのだろうと思えます。以上です。

副市長
後藤委員

ありがとうございました。続きまして、後藤委員お願いいたします。

私からはですね、この題目に対して、2点お話したいと思うのですが、校長時代もずっと、こういうことを考えて学校経営をしてきたつもりです。1点

目はとにかく考える力を中心とした能力を身につけさせる、これ1点目です。2点目は人格の完成をしっかりと学校はしていけるように育てていくという点ですね。1点目なのですが、やっぱり考えてみると本当に産業革命以来というか、すごい前ですけども、大量生産の時代に合った人を作るっていうのは、やっぱり日本の役割だったと思うのです。だからそれはうまくいったし、勤勉な国民が育ったわけなのです。だけど、それはもう本来ならば転換されてなきゃいけないのですが、まだ学校ではその余韻というか、残っているのです。先ほど市長もおっしゃられた通りなのです。つまり転換できにくいことなのです。それをどういうことかという、これというのは生活から得られるだけの知識じゃ足りないから知識を教えて、技能を教えて社会で通用するような人をいかに作るかと、それが学校の仕事だよということで、通用する力を作るみたいな。それでやっていったところ、通用しなくなったわけなのです。何で通用しなくなったかっていったら、社会が変わったのだと思うのです。しかし学校はいつまでも伝え教えること、伝承することを重視した教育が、いまだもってなされていると。家庭や地域社会も、それをよしとして、現在も脈々と続いているのだというふうに思っています。本来ならば現在とか、これからの学校がやることは一点目の先ほど言った、考えるっていうような機会をどう子どもに授けてあげられるかなんかと思うのです。デジタル化であり、AIのことであり、グローバル化であり、共生であり、さまざまな地球規模の問題が当たり前になってきた時代において、多様な人々の価値感を感じながら生きていくっていうのは、もう当たり前になっているのですけども、実は価値観そのものも、何とか均一化しているというか、同調化されるというか、それが、まだまだあるのだろうと。それはたやすいことではなくて非常に努力を要することなのだと思います。知識は単に覚え、習得し、再生するだけではなくて、知識をどういうふう子どもなりにつないで生み出していくかということ、新たなことではないかもしれませんが。先人が出した知識かもしれませんが。でも知識というのは作られるものというふうな構成で、私はずっと考えてきました。それはつまり創造する力なのです。考えて創造する力がやっぱり教育の中心になんかきやだめなんだろうというふうに思っております。

実は、創造というのは1人でできなくて、他者との関わりがない限り、新しい創造とか、クリエイティブなことは生まれにくいというふうに考えています。だから人がいるのです。家庭やICTだけではできない、人との関わりというのが、学校がやはり保証してあげないと、考えを判断し表現するという力を鍛え、伸ばせばこそ、これからの学校で、これはきっと社会で生きていく上の、いろいろなことがあろうとしてもそれを自分なりに操作したり考えたり対応したりする力になるはずなのです。その力を育てることがやはり学校であるのに、なかなか実はそれが具現化できていない。いまだに授業は前

向きの形が多いのは、やはりそれなのだ。つまり教え、伝えていくことに重視をし、できること、分かることというのは知識、技能のレベルで言っている。そういうところが問題だというふうに思っていて、それを考える力を伸ばす、を中心とした能力を育てるのが一つの意味。

2点目の人格の完成なのですが、これは、もうこれまでも脈々と続いていることだと思います。やはり自分だけとかICT等の機器だけで人格というのは育たなくて、そこがいろいろな経験をしていく、多様な他者との関わりを通して育んでいくものだというふうに、それが、やはり学校という場だろうと。過去は地域社会もかなりその力があつたのですが、なかなか地域社会では現状的には難しいというのがあると思います。実は、そのまちとも等の場は非常に良い場になっていますね。これまでなかった地域との結び合いが、縦ができたりとか、横が広がったりとか様々な遊びの工夫ができると。やはりこういうような場を作ってあげることが必要なのですね。ほっとけばできるのではなくて、それが学校の役割だと。だから、そうやって子どもは人格を形成していくわけですから、関わりにおいて、どうやったらより良くなるのかとか、どうやったら頑張れるのかとか、相手の心の痛みが分かるのか、そういう学びというのは環境を作ること。私はそれは人格を作る環境とはやはり学校に、今求められていると。どうぞ家庭や地域でやってくださいというのは、もうそれは簡単にはできない時代である。逆に、これからはそれを学校から家庭や地域に入れていく、巻き込んで一緒にやっていくというのが学校の大きな役割だと思うのですけれども、必要になってくるだろう、というふうに考えています。以上です。

副市長

ありがとうございました。ただ今、教育委員の皆様から貴重なご意見をいただいております。この件につきまして、市長からもお考えをお聞きしたいと思います。お願いします。

市長

感想になりますが、関根委員からコミュニケーションの話が出ました。トラブルも起こりますからね。どういうふうにコミュニケーションの中で解決していくか、ということがポイントかと思えます。

それから、関根委員から話があつた、金井小、金井中が、登校が大変なのですよね。古い話ですが、私も小学校1年生のときに、ランドセルを背負って、大体学校まで歩いて1時間という学校でしたね。今のつるっこのところに小学校があつたので、大蔵の田んぼを通りながら1時間でしたね。ランドセル背負って1時間往復するというのを続けると、結構体力付くのですよね。小学校時代ランドセルのほう重いのかと思うぐらいの細身の体で1時間歩かされたのですが、やはり登校というのは、その中でいろいろなことが起こるので、経験としてはいいのかなと思います。三輪のほうにジョギングで走っていると、朝、中学1年生の女子が重たいリュックを背負って、体重ほどではないのだけど、近いぐらいの重たいので鶴二中まで行くのだよね。こ

れは大変だなあ。何も背負っていないジョギングのほうが楽だなと思って見
ていますけど、通学というのは本当に、その中で、学校に遅れちゃいけない
とかいろいろなことがあるので、そういう体験をできるのではないかなと
思いました。

森山委員と後藤委員の話は、やはり教育の中身が変わらなければいけない要
素というのは何だということを、やはり感じさせていただきました。中学か
ら高校に行ったら下駄箱がないのね。掃除当番もなくなって。それから、2
時間目で大体弁当を食べてしまってよくて、お昼になったら学食に行って食
べていいっていう。随分変わりますよね、高校に行ったらね。あっちのほう
がよかったかなという気はするけど、小さい子が、統制が取れないから、そ
う簡単ではないかなと思いますけど、食事の意味も、やはり小中と、もっと
言えば小と中で違い、中と高で違うというのかな。食事の仕方とかね。そん
なことを感じました。意見ではなくて感想です。

副市長

ありがとうございます。今、学校に通学すれば学び、通学自体というかい
ろんなところでという市長からのお話がありました。時代とともに変わって
いかなければいけないということもあろうかと思えます。そういった意味で
は、最初に説明があった今回の学校統廃合を契機とした新しい学校づくりと
いうところが今日のテーマになっているわけなのですけれども、校舎は新し
くなるということで、ハード面が大きく変わるという先ほど説明がありまし
た。教室を広くしたり、という話になりました。また一方で教育委員からも
お話があったとおり学校と地域、まちともというお話もありましたけれども、
あるいは保護者の関係ということも学校の中でも非常に重要になってくる
と。そういう統廃合をするときに、どうやって再構築するか、子どもたちの
育ちを支えていく、ソフト面ということが非常に重要だということが発言の
中にあったというふうに捉えました。今回、学校統廃合を契機とした新たな
学校づくりということを今度は視点におきまして、教育委員の皆様からご意
見をいただきたいと思えます。それでは井上委員からご発言をお願いしたい
と思えます。

井上委員

私はハード面とソフト面の2点に分けてお話をしたいと思えます。まずハー
ド面について、施設環境のゆとりの必要性和学びの環境についてです。小中
学生の持ち物が非常に多いことはすでにご存じかと思えます。まず小学生は
ランドセル、教科書、ノートやドリル、習字セット、絵の具セット、算数セ
ット、鍵盤ハーモニカ、裁縫セット、体操着、粘土、粘土板、図書の本、音
楽バッグ、水泳バッグなど。時には図工や生活科で必要と言われた空き箱や
プリンカップ、発泡スチロールやらを大量に運ぶこともあり、そんなにたく
さんどこに置くのと心配になってしまうほどです。中学生はボックスタイプ
のリュックが流行っていますが、その大きさの平均は30リッターで、登山
や1泊旅行に行くのと同じぐらいの荷物の量とお伝えすると想像していた

だきやすいかもしれません。プラスして部活道具や着替えがある時は本当に荷物が嵩張ります。これらを狭い教室に各自が置くわけなので、通路が狭くなり、人が通る度、机が動いてしまったり、授業参観へ行くとロッカーからはみ出た荷物で、教室後方には保護者が立つ場所もないような学校も多いです。また、教室以外にも更衣室等が足りない場合もあるようです。体育の時間が他学年と重なると、一つの教室に3学年分45人の男子がひしめきあって着替えることも多々起きるそうです。体が大きくなってきているので窮屈だし、物が無くなったとか、ぶつかったとか、トラブルが増える原因にもなります。物も心も同じですが、ぎゅうぎゅう詰めだと余裕を持たず、追い詰められた状態になります。教室を広くし、収納スペースをきちんと確保していただけるようになることは保護者としても大変有り難いお話だと思います。

また、中1の息子に、「自分にとって理想的な学校ってどんな学校？」と尋ねたところ、「好きなことを学べる学校。学ぶ内容を自分で選んで自分自身で時間割を作ったり、好きな場所で学んだりしてみたい」とのことでした。それは学びの選択肢がたくさんあることを指していると思うのです。大人もそうですが、自分で選んで自分で学んだことは決して忘れません。これからの学校に求められていることは、子どもたちの学びの機会を奪わないこと、子どもたちが学びたいと思ったときに、その環境を用意することなのではないかと思います。「町田市新たな学校づくり推進計画(案)」にイメージ図が載っていますが、子どもたちが、じゃあみんなで作ってみようという気持ちになったときに、行動に移しやすいというのは探求、協働学習の最大の武器になると思いました。

次にソフト面です。学校に関わるきっかけづくりとしての新たな学校づくり。我が子が卒業してしまったら、学校が急に遠い存在になってしまうご家庭がほとんどかと思います。地域の防災拠点ともなっていますが、普段からつながりを持たずして、いざというときに地域住民と円滑な連携を取ることができのでしょうか。かつては親以外にも祖父母や町内会、多くの大人が子どもに接し、親同士や地域の人々とのつながりによって親として学び、育ち合う環境がありましたが、昨今核家族化、少子化、雇用環境の変化などにより、こうした地縁的な繋がりや人との関係が希薄化し、親が身近な人から子育てを学ぶ機会や情報共有する機会が減ってしまったように思います。そこで、この新たな学校づくりではコミュニティルームやラーニングセンターの地域開放などをきっかけに、もっと地域の方に学校のことを知ってもらい、興味を持ってもらうことが重要なのではないかと思います。そうすることで、例えば部活動の指導をお願いしたり、これから入学を控える未就学児の保護者の集う場になったり、生涯学習の場として講演会の会場になったり、様々な職業の方から出前授業や職業体験をさせていただいたり、コミュニティス

副市長
関根委員

クールに関わっていただけたり、一時的な他世代交流を越えた継続的なつながりを見出していけるのではないかと思います。以上です。

ありがとうございました。続きまして、関根委員よろしく申し上げます。私からもハード面とソフト面についてお話差し上げたいと思います。まず、ハード面におきまして、子どもたちの資質・能力を高めるための学校施設整備の重要性についてお話ししたいと思います。大前提として、統廃合は、学校が変わるチャンスです。この、各地域の学校一大プロジェクトである統廃合をきっかけに、新たな学校づくりをすることで、将来の町田の子どもたちが、夢や志を持ち、自ら学び、自ら考え、目標に向かってたくましく生きることのできる力を養い、未来を切り拓くために必要な資質や能力を育むことができます。故に、そのための学校施設環境の設備が必要となります。まずは子どもたちが一番長い時間を過ごす教室の広さについてです。私は、昨年度、検討部会におきましてメンバーの皆さんといくつかの小中学校の例を見たり、理想的な教室の広さや活動しやすい教室について、たくさん議論をしてまいりました。今、学校では授業中、教室の中でグループに分かれて話し合ったり、教室の前でグループ発表をしたり、テストをするために机を離したり、クラス全員で床を使って作業をしたりする際に机や椅子を動かします。その際に絶対的な広さが足りず、狭いスペースで窮屈に学習をしています。中学校では体の大きな子どもたちが動き回ることもままならず、自分の机の周りに溢れた荷物につまづいたり、先生が授業中に見て回る机間指導もできにくい状況です。

そこでいくつか具体的に挙げてみました。子どもたちが集い、協働的な学習を行うために、稼働しやすい机や椅子を使用し、展開しやすいオープンスペースも整備します。小学校は普通教室+オープンスペースもあり、より広い教室環境になることで、協働的な学習が実現でき、コミュニケーションも取りやすくなります。中学校は普通教室の面積が大幅に広くなり、今まで机の周りに溢れていた個人用の荷物、例えば大型リュックサック・教材・部活動の道具などを、個人用ロッカーに収納できるので、さらに使えることにより、ゆとりある学習活動ができます。これらのことが実現されると、小学校ではオープンスペースがあることで、より活動的に協働的に学習ができますし、学年でのちょっとした会合もできます。中学校では、成長した子どもたちがゆとりを持って教室で過ごすことができ、ロッカーに荷物を片付けられるので、より広く教室を使えます。

次に、時代に応じた多様な学習活動を展開するためにICT環境を整えなくてはなりません。各教室はもちろん、体育館などにも必要です。各教室や多目的ホール及び多目的室にはプロジェクター型の可動式大型掲示装置が整備され、壁面のホワイトボードの整備によりICTを活用した教育活動も推進できます。これについては、検討部会においてもICTを活用した最先端

のショールームなどを計画し、勉強して参りました。もう既に取り入れて結果を残している自治体もたくさんあり、未来の町田市の子どもたちが取り残されるわけにはいかないと感じました。また、図書やメディアなどを活用しながら、多様な学習活動を展開することができるラーニングセンターは、子どもたちの教育活動はもちろんのこと、教育に関して、また地域開放の際や、放課後活動にも活用できます。イメージは資料にあるパースどおりです。あと、習熟度別学習などの、学級を分割して授業を行う、少人数教室を設置することで、子ども一人ひとりのことを考えた、よりきめ細かな学習ができます。これは、今も各学校でも取り入れられていて十分な成果も得られていますが、教室不足で各学年の時間のやりくりにも困っていると聞きました。その他、学校の紹介や子どもたちの作品等を飾ったりする学校ギャラリーを作ったり、校舎内の共有部分にちょっとしたコミュニケーションスペースを作ることによって子どもたち同士が交流しやすくなり、コミュニケーション能力も養えると思います。

次に、ソフト面において学校と地域・家庭が協働するための学校施設環境整備の重要性についてお話ししたいと思います。統廃合によって、より広い地域の方々が集う場所である学校は、教育活動・放課後活動などを通じた連携・協働や、スポーツ・生涯学習・地域活動・その他の市民活動を通じて、市民が交流しながら活動できる場所を作る必要があると考えます。今現在、学校に来てくださるボランティアの方々が話し合ったり準備をする場も、そして十分なスペースもなく時間の制限がある空き教室をやりくりしながら使っている状況であり、活動場所と控え室が1階と4階に離れていたりする場合もあるので、とても不便な思いをさせてしまっております。現状を改善し、子どもたちの教育活動に関して、地域と学校が連携・協働するために、地域の方々が使用するスペース、例えばラーニングセンター・コミュニティルーム・ボランティアのための準備室や、更衣室・多目的ホール・PTA室などが必要であり、より地域の方々が集いやすい場所である、地域開放棟または地域開放区画に作るべきだと思います。また、学校施設を地域開放することや、教育活動・放課後活動への支援、スポーツ・生涯学習・地域活動などにおいて、市民が交流したり、活動しやすいように、学校サイドもしっかり協力体制を整えていく必要もあります。さらに、子どもたちのために学校へたくさんの方々が集まることになるので、駐車場・駐輪場の設備、そして子どもたちの防犯・安全対策、バリアフリーなどにも考慮することも大事です。今、展開している放課後活動の学童保育やまちとも、地域未来塾などで、もっと地域の方が入りやすいように活動場所を地域開放棟または地域開放区画に作る必要もあると思います。また、災害時の避難施設として、地域の方々が学校を利用することを考え、防災に必要なものの整備も必要です。今年度よりコミュニティスクール体制も始まります。今こそ学校と地域と家

庭が協働して子どもたちを育てる学校づくりのために、これらを実現すべきだと思います。これらのことが実現すると、子どもたちは学校に登校したくなり、親も安心して町田で子育てがしたくなり、学校は地域の自慢のシンボルとなるのではないのでしょうか。私からは以上です。

副市長
森山委員

ありがとうございました。続きまして、森山委員お願いします。

学校が学校として機能するということが、第一にある程度の児童数、生徒数が必要であるということが大前提だと思います。従って統廃合というときには、もちろんそういう議論がベースにあるわけですが、それは学校が学校としての機能を果たすということの最初のハードルだと思います。

6、7年前でしょうか、これも、中教審で大分議論されたわけですが、小学校と中学校の小中一貫教育、特に地方では少子化の関係で、そういうかたちでとにかく統廃合する、小学校だけの問題ではなくて小学校も中学校もそうです。そういうかたちでの統廃合を進めないと学校としての機能が果たせないということもあります。ですから今回もそうですけど、統廃合と言うと何となく名前が悪いイメージなのですが、統廃合によって新しいこれから先の教育を担う組織の土台を作るという意味での、そういう逆の観点から今後も進めていく必要があると思います。

ちょうど時期的にもコミュニティスクールの変換が図られています。学校が地域住民等と目標やビジョンを共有するということが必要になってくると言えます。地域と一体となって子どもたちを育む、地域とともに学校づくりということ 키워ドとしていますが、次の学校を考える上では今のようなことをベースにしないといけないと思います。ただ、コミュニティスクールが、なぜ今必要かということについては、最初に市長からお話がありましたとおり、子どもの未来の先行きが見えない状況なわけです。コンピューターが人間を超えてしまって、人間の仕事は全部奪われてしまうのではないかとということもデータとして出ています。特定の職業においては、職業そのものがなくなるのではないとも言われています。これは学校としては大きな危機なわけです。先行きが見えないという状況もあるし、今まで当たり前のように職業として成り立っていたものが、市長も5年でもう大きく変わる、5年後は分からないぐらい変わるとおっしゃっていましたが、まさに職業も先がどうなるのか、自分が就きたい職業すら先行き分からないという、そういうことになれば、地域で求められているものが何かということが相当重要になってくるだろうと思います。これを学校だけで考えるのはもちろん無理です。そこで地域の住民との意見とか考え方を教育に落とし込んでいくことが必要になります。これが恐らくコミュニティスクールの一つの姿ではないかと思います。もちろんコミュニティスクールにも課題はいっぱいあって、いろいろなところの話をしていると、子どもの育成や地域の環境整備につながるということ前提にしなければいけないのに、地域の意見を優先

しすぎてしまって、優先順位のベクトルの方向が違っているというような議論もあります。

あるいは、保護者や地域の良いように学校を好き勝手に考えることに、あまりにも積極的になりすぎて、クレームみたいなものになるということもあります。こういうものだけでは学校としての機能は果たさなくなりますから、やはり今回の統廃合の議論のときにはコミュニティスクールのことを考えなければいけないわけです。そこに地域に根ざした学校ということを検討するためのプランをしっかりと整えることが必要だと思います。例えば、海外では授業は全部オープンなのです。そして、その上に学校自体が公民館のように、地域の住民とか世の中へ貸出をしているのです。そうすると人の出入りができ、いろいろな人が入ってきます。それから、いろいろな人がその学校を使います。せつかくの大きな改革期ですので、そのぐらいのコミュニティスクールの活用の中場といったことも必要ではないかと思います。教職員以外の人脈も増えてきますから、その中で学校のボランティア活動とかそういうものを活性化していくでしょうし、地域で支えるというのは、そういう意味でのメリットがあると思います。また、学校施設の形態の枠には、ある程度とらわれないようにして、柔軟な発想を含めた検討も必要だと思いますし、学校設計を行うときに教育目標と教育課程の特色ある活動を前提にして、学校の施設設備というのも考えていかなければいけないので、そういう意味では学校の特色がハード面でもクリアできるような、そういう計画を立てる必要があると思います。以上です。

副市長
後藤委員

ありがとうございました。続きまして、後藤委員お願いします。
私はソフト面を中心にお話しします。先ほどのこととも少し関連するのですが、いかに創造する、考えるというような教育、授業を作るかということ。校長時代も、これは一つのポリシーでやってきたのですが、国語、算数、理科、社会の教科の学習の中だけでは、どうしても伝授、伝承が多くならざるを得ない部分が多いと。その中でも当然考える場面はあります。そこで研究開発学校というのを文科省からカリキュラムを工夫していいというのを受けて、21世紀スキル科というのを校長時代に作ったのです。これは何をさせるかという、目標から全ての責任を子どもに持たせて、できないことを改善し、できるようにするチャンスを与える教科として使ったのです。だから、子どもは必ず1回失敗するようなことを立てていく。しかしそれをもう一回立て直して、やり直していくことによって成功体験を味わう。そのときに、自分が学ぶということ、考えて行動するというところに価値を感じると。それを徹底して1年生から6年生までに年間35時間から50時間ずつ設定して、4年間研究実践しました。今は総合的な学習の時間の中でやっています。これをやって、やはり子どもたちは変わりました。子どもが一番好きな教科はこれだって言うのです。いまだに。だって自分が主役で

すからね。学校の学びの中にそういう場を作るというのが、今回のこの学校を新しくできるというのに、非常にそこに期待をしています。内容も変えなければいけないのだということを同時並行しないと、校舎だけが新しくなった、統合されて大きな学校になった、それで教育が変わるという点だけでは、やはりちょっと不十分であろうというふうに思うのですね。これを契機として、どんな学びを町田市として打ち立てていくのかということが一つ言えると思います。それがきっと学びの伝承を大切にしながらも、こういう取り組みによって子どもたちがクリエイティブに未来を夢見る子どもになるのだということを私は一つ期待しています。

2点目が、先ほどから皆さんが言っているコミュニティスクール等を中心とした、開かれた教育課程のことなのです。これも私も校長に成り立てから、すごくやりたくて、やりたくて、やってきたのですが、まずは自然環境のビオトープを整備しました。5年生の理科のメダカの育ち方の学習は一般的にはヒョロヒョロしているヒメダカが教室に置かれて、そこから勉強を始めるのですが、そうではなくて、生き生きとしたメダカを掬うところから始めようということでビオトープを整備し、鶴見川系のメダカを飼育し、何百匹も越冬するようになって、そこで掬い取るところから学習のセットをさせるようにしました。やはりそこに学ぶ意味で子どもたちは変わってくる。ただ、この施設を作るのは、学校だけでは無理なのです。地域の方とか自然クラブとか保護者とかそういう人の力を借りて一緒にやる。子どものこういう目的のために一緒にこういうものを作りたいので協働しましょうというようなこと。あるいは大人の学校というものを作りました。これは地域の高齢者の方々が、デイホームに行かれる方々が多いのです。その人たちが勉強したいと何名かがおっしゃられたのです。地域の方とお話する中で。では、その後、一緒に地域デイホームの方と協働して、学校の空いている時間帯、月曜日の放課後、お貸しして一緒に勉強をすると、その人たちは。子どもたちとも何か関わりの場があれば学校内で会うことがあるわけですから、そういうような場を工夫してみました。それを通して考えたのが、地域に開かれた教育課程というのは、学校側の都合だけではなくて、地域そのものの対象の方、あるいは地域の雰囲気とかも全てあるのでしょうか、そういうところと一緒に作り上げていくというような感じが必要なのではないかと思っています。何か学校のために地域の人が手を貸してください、学校が何をやるから地域が手伝うのですよ、ではなく、それをやったら地域の人が、やはりやり甲斐があって、まさにまちともが今そういうふうになってきているのだらうと思うのです。そういう場をこれからの学校は用意していかなければならない。率先して作っていかなければならない。従って、今回の「学校統廃合の契機と新たな学校づくり」は、ハード面を進めながら、何が地域やこの学校の特色であって、何をそういう面で作っていけば新しい学びの学校

として価値を帯びるのだというのを吟味して、町田の学校が全て特色があり、やはり、皆が、さすが町田市の学校だと。いろんな学校があっっているいろんな思いがあっっているいろんな地域の特性があっっている、ということが評価されるように作らなければ、これだけの大プロジェクトはもったいないと。私はその契機、その機会が今回打ち出されてきたということで大いに期待していますし、微力ですけど、そこに参画して頑張りたいと思っていますところ。以上です。

副市長
教育長

ありがとうございました。坂本教育長よろしく申し上げます。

もう既に他の教育委員の皆さんから、それぞれの見識に富んだ発言があったところなのですが、私からはハード面、ソフト面2点お話をさせていただきたいと思います。1点目はハード面として、市立小・中学校の老朽化の状況でございます。教育委員会には、毎年、予算編成の時期になると、小・中学校の校長会や小・中学校のPTAの連合組織から予算要望書を頂戴いたします。この要望の中で最も多いのが、学校施設の老朽化の問題に起因する要望でございます。2021年度、本年度の予算編成に向けた要望の中では、「校舎や体育館の雨漏りだとか剥がれた床を直してほしい」「給食やバリアフリーのためにエレベーターを設置してほしい」「校舎以外のトイレ・更衣室が老朽化して不衛生なのでリフォームしてほしい」などといったご要望が寄せられています。教育委員会では子どもたちの安全に関わるような修繕、改修工事はもちろん最優先で行っておりますし、その他のご要望についても厳しい財政状況の中ですが、優先順位をつけながら改修を進めておりますけれども、どうしても全ての学校のご要望にはお応えしきれないという現状がございます。さらに、2040年度までに児童・生徒が約30%減少するという見込みの中で、今後鉄筋コンクリート造りの校舎の耐用年数と言われる、築60年を迎える学校が続々と現実に現れますので、すべての学校を建て替えることは極めて困難な状況だというふうに認識をしております。この状況下において、町田の未来の子どもたちに、より良い教育環境をつくるためには、学校統廃合の議論というのは避けられないものでございます。学校の統廃合というと、何かネガティブなマイナスのイメージがありますが、何十年に1度の機会として、学校の位置を決め直すことができる機会であり、また学校を建て替えて新たな教育環境をつくれる機会でもございます。また、これまで抱えていた各学校が抱える様々な教育の課題の解消にもつなぐことができる機会とも言えると思います。教育委員会では、この避けることができない学校統廃合を、より良い新たな教育環境をつくる機会と前向きに考えて、先ほどご説明した二つの計画と一つの整備方針を一体的に検討してきました。この計画、方針の中で示している内容の必要性については、もうすでに先ほど教育委員の皆様からご発言がございましたが、この町田の新たな学校づくりの取り組みを進めることで、老朽化した学校施設を刷新してまいりたいというふうに

考えております。

2点目は、ソフト面として、学校と地域・保護者の皆様が協働した学校づくりということです。学校の統廃合は、保護者、地域の皆様からすれば、これまで当たり前にあった学校の位置が変更されたり、学校がなくなる、母校がなくなるということにご心配、ご不安があると思います。現在のそれぞれの学校には、開校にあたって、何代も続いた畑や田んぼを提供していただいたり、樹木や花壇、労力を提供したりしていただいておりますし、それぞれの地域で、おらが地区の学校を建てようという大きな希望、要望があって開校した学校ですので、それは当然のことというふうに思います。しかし、近年移転して改築した鶴川中学校や南第二小学校などもそうですが、学校の位置というものは未来永劫絶対的なものではございません。また、学校の名前についても、伝統のある学校であればあるほど、その前身となる学校があってその名前も変遷しております。そういう意味では、学校統廃合を契機とした新たな学校づくりというのは、学校と地域との関係を広域的に再構築し、その地域に新しい校舎の学校を建て、そこに新しい伝統をつくっていくという、そういう営みだというふうに思います。そして、この営みについては、子どもたちの社会性や人間関係を形成する力を育むために、地域ぐるみ、社会ぐるみで、子どもたちの育ちを支える環境をつくる機会にしたいというふうに考えております。教育委員会では、町田市版の教育振興基本計画である「町田市教育プラン」において「ともに育つ学校と地域の協働体制を確立する」そういう施策を掲げておりまして、その重点事業として「コミュニティスクールの推進」と「地域学校協働本部の設置」を掲げております。先ほど各委員からも同様のお話でしたが、これは、現在すべての市立小・中学校で取り組んでいる事業でございますが、学校統廃合という、その対象となった地域の学校に対する関心が非常に高まる機会を活用して、学校と地域、保護者の皆様が、ともに知恵を出し合い、学校運営に意見を反映し、育てたい子ども像や目指す学校像に関する学校運営のビジョンを共有することで、学校と地域、保護者の皆様がパートナーとして、相互に連携、協働していく学校づくりをさらに推進してまいりたいというふうに考えております。以上でございます。

副市長

ありがとうございました。教育委員の皆様そして教育長からのご意見をいただきました。市長からもお話をお願いしたいと思います。

市長

お話をうかがいまして、いろんなことが考えさせられるということで、各委員の皆さんには御礼申し上げます。これも、皆さんからお話がありましたとおり、今回の統廃合は目的が統廃合ではなく、チャンスとか、きっかけとかというお話だったかと思います。そうすると、教育目標をもう少しブレイクダウンした目標を、それぞれ62校、あるいは統合後で言えば41校かな、やはり地域の人を巻き込んで目標設定をする。必ず達成すべき目標

を、できればデジタルのほうがいいと思うのですが、数値で確認できる。そういうふうの設定をしていただければ有り難いなと思っています。それはハードというよりソフトなのですね。ソフトの目標を支えるのがハードですから、順番が逆ではないわけで、ソフトの目標をしっかりと書き切るといふか表現しきるといふか、そういうことをしていただければ有り難いなと思っています。全く違う話をしますと、市民病院の医療機能評価機構というところの審査を受けているのですが、そこは目標を何にする、レベルをいくつにする、それを全部文章で書かせます。それをいつまでに達成するといふふうには医療機能評価ではやっています。同じことだと思うのです。文章で表す、それを数字で表す、レベルを表すという作業をしていただくと、全部41種類の機能評価ができるのではないかな、と思います。もちろん、それを支えるお金だとかハードだとかというのは、市長以下、頑張ってくださいけど、その前の部分は、それこそ分かるようにして。これは同時に最初に言いました、ICTの問題、一緒にやるので、悪く言うと二つの災害が来たということではなくて、二つのチャンスが一遍に来たといふふうには受け取ってもらいたいですね、ICTのこと。それはそれ、これはこれではなくて、両方を一遍に、これもチャンスと捉えて、それぞれの教育での我々自身の目標というのを41なら41作っていただければ有り難いなと思いました。

副市長

ありがとうございました。本日は教育委員の皆様と市長からも学校統廃合をきっかけに「新たな学校づくり」ということでのテーマ、その必要性について、ハード面、ソフト面両面からお考えをいただいたところであります。ちょっと時間も過ぎているのですが、もし皆様のほうからここでもう少し発言したいということがあったら、忘れたところがあったということであればお聞きしたいのですが、ありますでしょうか。よろしいですか。今日の会議を通じまして、やはり統廃合というのをきっかけに、新たな学校、これをチャンスと捉えて、これから進んで行くということについて、また考え方についても、いろんな意味で共通認識ができたのではないかなといふふうに感じております。これから市長部局と教育委員会がこの新たな学校、統廃合をきっかけに、新たな時代に向かった学校をつくっていくということで共通認識を持って進めていきたいと思っています。今日の会議を非常に重要、いろんな意見もいただいておりますので、これを活かしてより良いものにしていきたいと思っています。これを持ちまして、2021年度町田市総合教育会議を終了したいと思います。皆様ありがとうございました。

一同

ありがとうございました。

【午後0時3分閉会】